

アイロニーの重層性

——*The Country Wife* についての一つの考察——

丸 橋 良 雄

I

William Wycherley (1640-1715) によって書かれた *The Country Wife* (1675) という喜劇は、確かにショッキングな内容であり、Restoration comedy の中ではその道徳性をめぐって、これまでのところ他を圧倒して議論を呼ぶような作品であった。古くは Jeremy Collier が Restoration comedy は総じて不道徳な題材を扱っていると非難している。Thomas B. Macaulay はヴィクトリア朝の見解を示すものとして、Wycherley の喜劇は卑猥で下劣な内容であると酷評している。一方、擁護派の代表である Charles Lamb は、「Wycherley も含めて Restoration comedy の世界は現実のものではなく、空想の自由の天地である。そこでは快楽が義務であり、自由放蕩に耽ることが作法であるような人工的な世界であるから、日常生活の道徳律をそれに当てはめることは的外れである。」という趣旨の事を述べている。

20世紀に入ると、ニュアンスの差こそそれぞれあるにしても、*The Country Wife* はかなり多くの批評家によって「諷刺劇」と見做されている。具体例をいくつか挙げると、H.T.E. Perry はこの劇を ‘jealousy’ に対する諷刺を扱ったもの¹⁾ というように、Kenneth Muir は諷刺の矛先は主として ‘female hypocrisy’ に向けられていると、²⁾ また、R. Edgley はこの劇のテーマは単に ‘folly’ を暴露することにある、³⁾ と述べている。更に、Rose A. Zimbardo は偽

善に覆われた ‘lust’ が諷刺の対象になっている⁴⁾ と指摘している。他の批評例を見ると、この劇の rake-hero である Horner を称して、Bonamy Dobrée は ‘grim, nightmare figure’⁵⁾ というように、これに反して、Virginia O. Birdsall は彼のことを ‘the life force triumphant’ を象徴するものとか、‘a wholly positive and creative comic hero’⁶⁾ とさえ呼んでいる。John Palmer に至っては、この劇は ‘the most perfect farce in English dramatic literature’⁷⁾ というように評している。いろいろとかまびすしいが、要するに作品の諷刺性と Horner という人物をどのように解釈するかという二点に、批評家の見解が収斂しているように思われる。

The Country Wife の諷刺性はなるほど衆目の一致するところであるが、諷刺の要素というのは何もこの作品に固有なものではなくて、他の Restoration comedy にもある程度当てはまることではないのか。Thomas H. Fujimura が類別する為に用いた用語を借りるなら、Restoration comedy とは一般的に言って、‘Truewit’ の男が ‘Witwoud’ や ‘Witless’⁸⁾ をまんまと出し抜いて、最後には ‘Truewit’ の女と結ばれ、あわよくば彼女の財産まで手に入れる物語を扱ったものであるから、当然そのプロセスにおいて ‘Witwoud’ や ‘Witless’ は揶揄や嘲笑の対象になる運命である。従って、この作品を諷刺劇と呼んでみても余り意味のないことである。それだけでは片付かない何かがあるのだ。Molière や Ben Jonson 流の一貫した道徳的基準を持った本格的な諷刺劇ではないし、ましてやロマンチック・コメディでもない。Horner の機智に富んだ有りそうもない策謀——これが Horner の人物評を著しく困難にしている要因の一つである——によりプロットが展開して行くという点では、ファースに近いものがあるが、‘the most perfect farce’ と決めつけることには抵抗がある。

The Country Wife を評価する上で重要な鍵となるのは Horner の役割である。彼は常に観客と同じ視点に立ってほとんどすべての状況を把握しており、

まるで劇作家そのものであるかの如くに、状況を巧みに操作している。劇の冒頭と結末のセリフを口にするのも Horner であり、圧倒的に支配的な役割を占めている。

Horner (*Aside*)

A quack is as fit for a pimp as a midwife for a bawd; they are
still but in their way both helpers of nature. (I. i. 1-2)⁹⁾

冒頭部のこの機智的表現が暗示しているように、この喜劇にはアイロニーがさまざまなレベルで潜在化、顕在化していて、幾層もの複雑な構造から成り立っている。大団円一つを見ても普通の喜劇とは異なった展開をしているのがわかる。喜劇の定石通りに行けば、最後には真実が明らかにされて、ある種の障害を取り除かれて、罪を犯した者が悔悟の後に許される。Poetic justice が達成され愛する者が結ばれて、すべてめでたしめでたしに終るものである。ところが、この劇では当事者はすべて隠蔽に加担して何も明らかにされず、猥色に耽った Horner も何も咎められることなくその場を取り繕って、‘a dance of cuckolds’ を導いて形だけは「終りよければすべてよし」という体裁をとっている。これは極めてアイロニカルな結末であり、この劇が ‘anti-comedy’¹⁰⁾ とか ‘Black Comedy’¹¹⁾ と呼ばれる所以である。果してそれだけであろうか。

単に Horner の言葉や態度がアイロニカルなものであるのみならず、この劇を構成するプロットや登場人物が置かれている状況や劇のモチーフにさえ、アイロニカルな仕掛けが縦横に張り回らされていて、このようなアイロニーの重層性が単に諷刺性だけでは割り切れない、この劇の独得の雰囲気醸し出しするように思われる。本稿では特にアイロニーに焦点を絞って、この劇の一つの側面を考察してみたい。

II

Restoration comedy の世界では恋愛というのは通常姦通の形をとっている。事実 Charles II の華やかな宮廷の乱脈ぶりは徹底していて、貴族やその夫人たちの放蕩な生活のエピソードは枚挙に遑がないほどであり、そのような放蕩な生活の時代の反映が Wycherley の喜劇であると言えるだろう。姦通は才子 (wit) にとっては重大な関心事であり、的確な判断や機智的表現を駆使できる知的能力に加えて、粹に行動することが紳士道とされた。公序良俗や美德というものはそこでは死語となっており、情に溺れることなく策謀の世界で闊歩することが機智の精神であった。価値基準として、機智が道徳的な善悪に取って代ったのである。

The Country Wife は Horner の猥色を扱った主筋と、Alithea をめぐって Sparkish と Harcourt の確執を描いた脇筋から成立している喜劇である。脇筋の方は後に検証することにして、先ず Horner の方である。Horner には comic hero という名称は当てはまらないだろう。彼は結婚というものを否定し、ひたすら猥色ということだけに官能的な関心を示す rake-hero である。アイロニストでもあり、言行に裏表のある人物である。彼は狙った女と次々に関係を持っても決して満足感がなく、いつまでも飽くことなく性的な交渉を繰り返そうとする。また、女に対して嫌悪感や恐怖心を持っている。Restoration comedy に登場するこのようなタイプの主人公の先駆けとして Dorimant や Courtall がいるが、Anthony Kaufman は Horner のそのような性格に 'Don Juan character' との共通点を見い出している。¹²⁾ Pinchwife の妻 Margery との関係が暴露されそうになった時、彼女の夫の執拗な詰問に対して、Horner は自分の保身と 'criminal' である Margery の 'honour' を守る為に、無実の Alithea に不利な発言をしようとする。

Horner (*Aside*)

Now must I wrong one woman for another's sake. But that's
no new thing with me; for in these cases I am still on the
criminal's side, against the innocent. (V. iv. 222-4)

彼の言動は利己的で不誠実なものであり、このような Horner を評して Anne Righter や Anthony Kaufman は、彼は hero として意図されていないと述べている。¹³⁾ しかしながら、Wycherley はそういう anti-hero としての否定的な側面だけを描いているのではない。‘Honour’ とか ‘virtue’ という強迫観念に取り憑かれているけれども、Alithea は偽善性とは一切無縁の誠実な女性であり、その彼女がそれまで Horner のことを ‘a man of honour’ (V. iv. 238) と見做していたのである。確かに Horner は Wycherley の創造した人物の中で記憶に残るユニークなキャラクターであり、ある意味で魅力的であるが、その複雑さ故に評価するのが困難である。軽蔑することもあれば拍手喝采することもあり、観客の側に ambivalence が存在するのだ。

Horner の性格あるいは劇中で彼が果たす役割に関して、ここで肯定的な側面を見てみよう。狼色の為には性的不能者を巧みに装って女に近づくという¹⁴⁾ 機智に富んだ策謀により、プロットが展開して行くが、Pinchwife は彼の噂を聞いていないし、さまざまな間違いが生じて込み入ったものになっている。Horner は結果的に人妻と関係を持ち、その夫を出し抜いて彼らの愚かさを暴露することにみごとに成功した ‘Truewit’ である。事に当って常に冷静で知的で予め計算しておき、決して情に溺れることなく、いかなる状況に遭遇しても決して動じることなく行動できる、切れるタイプの人間である。Horner はいわゆる Iago が呼ばれているような意味での villain ではない。なるほど人妻を寝取るというのは一般論として人の道に外れる行いであるだろう。だが、Restoration comedy の世界では、それは機智の持ち主であることの証左であり、そこに道徳的な価値基準を適用しても余り意味のないことである。

Horner の偽装は単に性欲を満足させる為だけのものではなくて、それにより偽善的な仮面を被っている女の化けの皮を剥ぎ、同時に愚かな夫を罰する (cuckold にする) 為の諷刺的な手段として用いられている、ということである。

Horner を形容する言葉として劇中では、‘eunuch’ (I. i. 5), ‘odious ... as the small pox, as the great ones, as Aniseed Robin’ (I. i. 15-19), ‘Stinking, mortified, rotten French wether’ (II. i. 459), ‘old maimed general’ (III. ii. 48), ‘French capon’ (V. iv. 359) などといったグロテスクで病的な嫌悪すべきイメージが散見される。James Thompson も、*The Country Wife* は極めてメタフォリックな劇であり、冒頭部がいきなり直喩で始まり、第一幕だけでもあと22例もそういう比喩的表現が見られる、と指摘している。¹⁵⁾ ‘Eunuch’ としての Horner をアピールする為直喩のひんばんな使用により、彼のグロテスクなイメージが登場人物や我々観客の間に定着しているけれども、忘れてならない事は、これはあくまで Horner の偽装であるということだ。素顔の彼は Restoration rake であるが、魅力的な ‘Truewit’ であり、Sparkish の言葉を借りれば ‘a comely person’ (IV. iii. 139) である。比喩的表現によって描く彼のイメージと実際の彼の行動との間には乖離がある。言い換えれば、彼の行動から Horner 像が導かれるというよりは、比喩が勝ち過ぎて、比喩そのものに我々が欺かれているのである。この辺りのギャップが Horner という人物の解釈を曖昧にしている一つの要因であるように思われる。

Horner には Jaques のような pessimist や cynic という名称は当てはまらないだろう。彼は何よりも ironist である。多種多様な比喩的表現を駆使した彼のセリフは、他にかこつけて遠回しに悪口を言ったり、言葉の意味を裏腹に用いるものである。彼のアイロニーがいかなる性質のものであるかを知る為に、ここでいくつか典型的な例を挙げてみよう。攻撃の対象となっているのは次の4人である。

a. Sparkish

You know 'tis a very hard thing to be rid of him for he's one of those nauseous offerers at wit, who, like the worst fiddlers, run themselves into all companies. (I. i. 228-30)

b. Sir Jasper Fidget

... But I'd

have you to know, since I cannot be your journeyman by night, I will not be your drudge by day, to squire your wife about and be your man of straw, or scarecrow, only to pies and jays that would be nibbling at your forbidden fruit. I shall shortly be the hackney gentleman-usher of the town. (IV. iii. 86-91)

c. Pinchwife

No, the word is, I'll marry and live honest. But a marriage vow is like a penitent gamester's oath, and entering into bonds and penalties to stint himself to such a particular small sum at play for the future, which makes him but the more eager, and not being able to hold out, loses his money again and his forfeit to boot. (I. i. 413-8)

d. Lady Fidget を含む 'the virtuous gang'

Oh, amongst friends, amongst friends. For your bigots in honour are just like those in religion. They fear the eye of the world more than the eye of heaven, and think there is no virtue but railing at vice, and no sin but giving scandal. They rail at a poor, little, kept player, and keep themselves some young, modest pulpit comedian to be privy to their sins in their closets, not to tell 'em of them in their chapels. (IV. iii. 22-8)

Horner のプロットは最後には真実が何も啓示されないで、嘘でこり固まった

アイロニカルな結末を迎えることは、すでに指摘した通りである。だが、ここで非常に素朴な疑問が生じて来る。端的に言えば、何故 Horner は最後に懲らしめられないのか、また、彼の偽装が一体いつまで続くのか、ということである。もし Horner が偽善家や愚者が住人であるこの世界で、これから先も猟色を続けて行くつもりであれば、impotent を装って生きて行かなければならぬだろう。自ら選んだ方法とは言え、終始演技を持続して素の Horner に決して戻れないというのはある種の苦痛であるに違いない。これは Horner に対する Wycherley の一種の当て擦り——問題は何も解決していないかに見えるが、実は裏に緩やかな罰が潜在している——であると考えるのは穿った見方であろうか。快楽と苦痛が背中合わせになっていて、快楽を求めようとすれば、自らの手で我が身を苦しめることになるところがアイロニカルである。この隠れた「落ち」の存在が Wycherley 流の comic justice と言えるのではないだろうか。このように考えると、この劇は単なる anti-comedy や black comedy というより、拮りを利かせた ironical comedy と呼ぶ方が相応しいだろう。

Horner の偽装により病める社会の患者とも言うべき偽善者が暴露されて、彼は医者宜しく治療することに成功したけれども、その医者自身がこれから先もずっと病 (impotence) を装わなければならないというのも、比喩的なレベルでは皮肉であるだろう。

Quack

Well, I wish you luck and many patients whilst I go to mine.

(I. i. 164)

他の登場人物に対する Horner の言動がアイロニーを帯びていることは言うまでもないが、このように Horner 自身もまた Wycherley によるアイロニーの犠牲者にされているのである。

III

Restoration comedy は一般的に言って結末よりプロセスが重要である。その意味では、Horner が二人の夫 (Sir Jasper と Pinchwife) を出し抜いて彼らの妻を寝取るプロットは、アイロニーの観点から見ると興味深いものがある。Sir Jasper は 'Witless' である。世間の噂を鵜呑みにするだけの騙されやすい愚か者であるのみならず、仕事第一主義の人間 ('grave man of business') であり、夫としての務めを怠そかにしている。Restoration comedy の世界では男女平等の言動が見られ、女も男と同様性欲を持った生物であるし、快楽を追求する姿が描かれている。Sir Jasper は妻を満足させることができなくて、自分の身代わりになって妻の相手をしてくれる無害な男 ('innocent playfellow') を探している時に、折しも Horner の噂を聞いて彼を選んだわけである。Sir Jasper は二重の意味で才子として失格である。第一に、恋愛よりも仕事を優先するようなやばな考え方は、Restoration hero の価値感に反するからだ。

Business must be preferred always before love
and ceremony with the wise, Mr. Horner. (I. i. 107-8)

第二に、こちらの方がはるかにゆゆしいことであるが、妻帯者にとっては最大の屈辱である cuckold の汚名を、Horner によってまんまと着せらせている点である。次の Sir Jasper の愚かな傍白は喜劇に適用されたドラマチック・アイロニーとしての響きを持っている。機智を欠き、精神的にも肉体的にも自分の妻を満足させることができなくて、夫としての要件を欠いている。彼のそのような怠慢や無能さが嘲笑されているのである。Sir Jasper はある意味で(必ずしも性的にという意味だけではない) impotent と言えるのである。

...(*Aside*) 'Tis as much a
 husband's prudence to provide innocent diversion for a wife
 as to hinder her unlawful pleasures, and he had better
 employ her than let her employ herself.—Farewell.

(I. i. 116-9)

Sir Jasper の妻 Lady Fidget を含む三人の女は “the virtuous gang” と呼ばれているが、その偽善性が Wycherley によって攻撃されている場面に次に注目してみたい。彼女たちの何が一番問題であるかと言えば、それは Horner の次の簡潔な表現の中に示されている。

A pox upon 'em, and all that force nature, and would be still
 what she forbids 'em! Affectation is her greatest monster.

(I. i. 249-50)

都会の女の見せかけというのは「自然さ」を損う行為であり、田舎女房の Margery が持ち合わせている無邪気さと際立った対象を成して、実態と掛け離れた偽善性がますます強調されることになる。それが暴露される場面は、the china scene (IV. iii) と the drinking scene (V. iv) である。

当時陶器を集めることは一種のファッションであり、しかも、陶器店はしばしば逢引の場所として利用されていた。当時の観客には身近な題材を用いて、作者はここで喜劇的效果を挙げることにみごとに成功している。Horner の宿を訪ねる女は ‘honour’ とか ‘virtue’ という社会的仮面を被っているだけで、実は裏に強い性欲が潜んでいることを赤裸々に描写している。Lady Fidget は夫公認(?)の Horner との情事を楽しむ為に彼の宿にやって来るが、いざという時になって夫もまたそこへ来る。だが、隣の部屋でゆっくりと陶器を鑑賞するという口実にして、二人共そちらの方へ行ってしまう、大胆にも夫が

居る部屋の隣で性的な関係を持つことになる。ここでは本物の impotent である夫が粉い者の impotent である Horner により cuckold されるという、極めてアイロニカルな構図が見られる。

そこへ同じ目的で Mrs. Squeamish がやって来る。夫が居る部屋の隣で妻が他の男と関係を持ったり、女の性欲を露骨に描いている為、この場面はすこぶる評判が悪いけれども、実際はどうであろうか。

Lady Fidget

And I have been toiling and moiling for the prettiest piece of china, my dear,

Horner

Nay, she has been too hard for me, do what I could.

Squeamish

O lord, I'll have some china too. Good Mr. Horner, don't you think to give other people china, and me none. Come in with me too.

Horner

Upon my honour, I have none left now.

Squeamish

Nay, nay, I have known you deny your china before now, but you shan't put me off so. Come.

Horner

This lady had the last there.

Lady Fidget

Yes indeed, madam, to my certain knowledge he has no more left.

Squeamish

Oh, but it may be he may have some you could not find.

Lady Fidget

What, d'y think if he had had any left, I would not have had it too? For we women of quality never think we have china

enough.

Horner

Do not take it ill, I cannot make china for you all, but I will
have a roll-wagon for you too, another time.

Squeamish

Thank you, dear toad.

(IV. iii. 181-99)

ここでは三角関係の当事者とそこに居合わせている Sir Jasper と Old Lady Squeamish との間では、状況認識の上でギャップがある。前者にとっては‘china’というのは性行為そのものを意味するが、後者は文字通り陶器というように受け取っていて、double-entendre が成立している好箇の例である。性行為そのものに対するストレートな連想が存在する一方で、それが陶器鑑賞の話題へと昇華され、そのギャップが笑いを生み出す為結果的に卑猥さは抑制されて、アイロニカルな効果を生み出していると言えるだろう。

The drinking scene は、Lady Fidget 以下3人の ‘the virtuous gang’ が Horner の宿を訪ねて、酒を飲んだ勢いで偽善的な仮面をかなぐり捨てて、すでに関係を持った男の前で安心して本音を語るグロテスクな場面である。女も男と同様快楽を求める生物であるから、酒を飲んだり不倫をして何が悪いのか、世間に知られさえしなければ構わないではないか、という主張にこの場面は支えられている。彼女たちの恋愛観は服飾 (V. iv. 66-7, 72-3) や食物 (V. iv. 75-7, 82-4) の比喩を巧みに用いたセリフに窺える。世間の夫は自分たち (‘the richest stuffs’, ‘a good table’) には見向きもしないで、人妻 (‘another man’s meat’) やその他下々の女 (‘druggests’, ‘a common house’) に関心を寄せていることを咎め、欲求不満に陥っている。ここでは服飾や食物に対する欲求と同等のものとして、性欲が取上げられているのである。

IV

親子程年令の離れた男が無邪気な田舎娘と結婚するというのは、その裏に老世代と若世代の対立という図式を暗示するものであり、喜劇にはよく見られる設定である。これよりおよそ100年後 Richard B. Sheridan によって書かれた *The School for Scandal* (1777) という喜劇にも同じような状況が見られる。そこでは May-December marriage の当事者は Sir Peter Teazle とその妻 Lady Teazle である。ところが、Pinchwife と決定的に違うところは、Sir Peter は妻の人格を認め何より一人の人間として接し妻を愛しているけれども、¹⁶⁾ Pinchwife にはそういうところが微塵も見られない、という点である。

Pinchwife はこれまで放蕩者で鳴らし、さんざん女遊びに耽ってから ('such a whoremaster as you, one that knew the town so much, and women so well.' (I. i. 349-50)), 田舎のおぼこ娘と結婚している。Margery との結婚は愛情によって結びついたものでは決してない。彼は過去の苦い経験から女性不信に陥り ('The jades would jilt me; I could never keep a whore to myself' (I. i. 429-30)), 都会の女を避けて、cuckold にされる危険のない Margery と結婚して、揚句の果てに用心の為に妻を田舎の屋敷に閉じこめているような男である。Pinchwife の異常なまでの女性不信や嫉妬心は病的なものである。妻に満足感を与えることなく、人間性を無視して彼女を動物扱いしている姿 ('dough-baked, senseless, indocile animals, women' (IV. iv. 36-7)) は、彼が夫として欠陥のある人間であるということを露呈している。これ以外にも Margery を形容する言葉として、Pinchwife は 'At least we are a little surer of the breed there, know what her keeping has been, whether foiled or unsound.' (I. i. 355-6) と言って彼女を家畜扱いしている。このような比喩的表現は彼の結婚観が健全なものではなくて、偏向した性質のものであることを端的に物語っている。結婚というものは愛情は元より男女平等、相互信頼の原則に基づくのが自然な形で

あるだろう。Horner の言葉を借りれば、Pinchwife は ‘soldiers’ としての妻に ‘good pay’ (I.i. 433) を怠っていることになる。彼の行為は反社会的で自然に逆らうものであるだろう。そうして、Sir Jasper の場合と同様と、精神的にも肉体的にも妻に満足を与えられないある意味で impotent の Pinchwife が、pseudo impotent の Horner により cuckold にされるという皮肉な状況が待ち受けている。

Margery は都会育ちの Alitheia と比べると、やぼで垢抜けしていなくて愚かな一面があり、ロンドンという都会でどのように振舞っているかわからなくて当惑している。ぎこちなさがあるものの若々しくて愛らしく、世の習わしに慣れていない無邪気な女である。Horner が Pinchwife の妻を寝取るプロットで極めてアイロニカルなことは、無知で未熟な田舎女房に過ぎなかった Margery がこともあろうに、Restoration comedy の世界の習わしに慣れるべく教育の手解きを受けたのは、他ならぬ夫であったという事実である。Pinchwife こその他の誰より以上に都会の退廃的な魅力を植え付けるという点で、有能な教育者になっているのである。彼が最も恐れていた二つの事態を結果的に招くことに成功した為に——一つは彼自身 cuckold にされたこと、もう一つは Margery が田舎女房から ‘city wife’ に変貌したこと—— Pinchwife は二重の意味でアイロニカルな状況に置かれている。

Margery は「劇場で彼女の姿を見た男 (Horner) が一目惚れした」という夫の言葉を聞いて、関心を示すようになる。Pinchwife としては、妹の Alitheia の結婚式に出る為に止むなく Margery を連れて来ているが、ロンドンに滞在中はできる限り都会の快楽には触れさせないように努めていた。夫の命令により外出時は正体がわからないように男装させられた Margery は、the New Exchange の路上で始めて Horner に会う。だが、Horner はそれが Margery であると見抜き、夫が油断しているすきに乗じて彼女を弄ぶ。これをきっかけに彼女は Horner に対する思いを募らせるが、Pinchwife は嫉妬の余り今後は決

して二人を会わせないようにする。

Horner との交際を絶つという偽りの手紙を夫により無理やり書かされることになるが、とっさの思いつきでそれと本心を書いた手紙とを、夫の目を盗んで摩り替えてしまう。機智に裏付けられた彼女の言動はそれだけではない。Margery は Horner 宛に書いた 2 通目の手紙を夫に見られてしまうが、Alithea に代筆を頼まれたものと巧みに偽り、Pinchwife は妻を守る為なら妹を Horner に与えようと決意する。そのような夫の目を欺いて Margery は変装により Alithea に成り済まして、Horner の家まで夫に連れて行ってもらうことになる。そうとは知らずに、夫が自分の妻をライバルの手に委ねるというアイロニカルな状況は、Restoration comedy では普通に見られるものである。ここでは色恋にかけては海千山千の夫よりうぶな Margery の機智の方が勝り、立場が逆転している。Restoration comedy には都会と田舎の対立というモチーフがよく見られる。田舎は都会より劣るものであり、そこに住む人間は粗野であり都会人により馬鹿にされるというのが普通の図式であるが、*The Country Wife* ではそれが逆転してアイロニカルな扱いをされている。

Horner の宿で Margery は密会を楽しむが、そこへ登場人物全員が偶然来ることになり、妻がそこに居合わせていることを不審に思った Pinchwife が嫉妬の余り Horner に向って剣を抜き、あわや Horner の正体が暴露されそうになる。しかし、Horner と関係を持った女と Quack は全員口を合わせて彼を本物の 'eunuch' ということにしておく。Margery は当初それを否定するが、周囲の者に促されて、そうする事が Restoration comedy 流の円満な解決法であることを学んで、そういう世の習わしに従うことにする。

V

この劇の結末には登場人物の結婚観が如実に現われている。

Alithea

... Women and fortune are truest still to those that trust
'em.

Lucy

And any wild thing grows but the more fierce and hungry for
being kept up, and more dangerous to the keeper.

Alithea

There's doctrine for all husbands, Mr. Harcourt.

Harcourt

I edify, madam, so much that I am impatient till I am one.

Dorilant

And I edify so much by example I will never be one.

Sparkish

And because I will not disparage my parts I'll ne'er be one.

Horner

And I, alas, can't be one.

Pinchwife

But I must be one — against my will, to a country wife, with a
country murrain to me.

Mrs. Pinchwife (*Aside*)

And I must be a country wife still too, I find, for I can't, like
a city one, be rid of my musty husband and do what I list.

(V. iv. 375-87)

Alithea の場合は、夫婦というものはお互い信頼し合い相手の人間性を尊重すべきである、という立場を取っている。Pinchwife 夫妻の場合は 'country murrain' や 'musty husband' というグロテスクな呼称が暗示しているように、これから先も明らかに不幸な結婚生活が続くことを示唆している。Horner のセリフは無論本音ではなく演技の一環として受け止めるべき性質のものであり、これから先も今の状態（偽装）を続けることになるだろう。結婚を否定する Dorilant と Sparkish の場合はそれなりに Restoration comedy の登場人物に相

応しいセリフである。注目すべきは Harcourt である。彼はコンヴェンション通り恋に陥った 'Truewit' の自然の成り行きとして、結婚というものをはっきりと肯定している。

Alithea の婚約者の Sparkish は Restoration comedy の舞台ではお馴染みの「めかし屋」(fop, dandy) タイプの人間である。それほど才能がないのに才子を気取り ('Witwoud'), 劇場に足を運ぶのも実際芝居を見るのが目的ではなく、他人から妬まれたり見せびらかす為に行くような、自己顕示欲の強い人間である。また、我こそはファッションの典型であると背伸びをしている愚か者である。Pinchwife のように嫉妬に凝り固まった人間ではないけれども、Harcourt が自分の婚約者に魅力を感じて口説いていることさえ見抜けないでいるような鈍感な人間である。財産目当てに求愛し、彼女を物扱いするような見下り果てた男である。

これに反してライバルの Harcourt は 'Truewit' であり、典型的な Restoration hero である。Alithea に一目惚れするや遊びではなく真面目に結婚したいという純粋な気持を吐露している。(II. i. 153-6) Alithea は知的で理想的なヒロインである。その名前が暗示する(真実という意味を示すギリシア語)ように誠実な人柄であり、彼女にとって 'honour' という概念は善悪という道徳的な基準に基づくものである。世間体にこだわることなく遵守されるべき道徳的義務である、と彼女は考えている。このような倫理観は 'the virtuous gang' のそれと一線を劃しているが、余りにも 'honour' とか 'virtue' という強迫観念に取り憑かれ過ぎるという欠点がある。その為相手に失望しながらも Sparkish との婚約をいつまでも解消できないジレンマに陥っている。そんな彼女が態度を改めるきっかけになったのは、妹の幸せを犠牲にしてまで妻の操を守ることを優先した Pinchwife の不誠実な態度と、Sparkish の誤解から生じた彼女への嫉妬混じりの暴言 (V. iii. 67-73) である。

情事の相手である Margery を守る為に Horner が Alithea に不利な発言をし

た時、Harcourt は毅然たる態度を取って、Alithea を擁護する為に友人の Horner と対決する姿勢を披瀝するような誠実な恋人である。Harcourt が parson に変装して、Sparkish と Alithea を結婚させようとする場面には興味深い現象が見られる。ここでは Sparkish より Harcourt の方が機智が勝っていることが明らかになるが、parson を装って実は Harcourt 自身 Alithea に求婚しているのである。もちろんその事は ‘Truewit’ の Alithea も分っている。‘I desire nothing more than to marry you’ (IV. i. 142) という Harcourt のセリフは、Sparkish に向っては「あなたの結婚式を行いたい」と表向きはしておいて、その裏「あなたと結婚したい」と Alithea に言っているのは自明のことである。

すでに指摘したように、Horner と ‘the virtuous gang’, Pinchwife 夫妻の場合には、彼らの恋愛観や結婚観は露骨な性欲や女性蔑視に結びつく服飾、食物、動物、家畜などの比喩を用いたセリフの中に窺うことができた。しかしながら Harcourt と Alithea の間にはそのような種類の比喩的表現は皆無であるし、終始真面目な言葉で語られている。この事は彼らの恋愛が姦通や不幸な結婚とは異なり、真面目な性質のものであることを物語っているのではないだろうか。Harcourt は聖職者らしく、‘divine, heavenly creature’ (IV. i. 125), ‘seraphic lady’ (IV. i. 136) などという宗教的な比喩を雑えた、時代錯誤とも言うべき大袈裟で理想的な愛の言葉で Alithea に語りかけているが、他の場合と比喩の性質が全く異なることに気づくだろう。

Harcourt は Horner と同様、これまで複数の女と性的な関係があったことは彼の言動から推察できるが、少なくとも Alithea に対する彼の気持は純粹な愛情に基づく誠実なものであり、この点で猟色家の Horner とは一線を劃している。

このように *The Country Wife* という劇には、Restoration の社会というコンテキストで、一方で Horner の行動に象徴されるいかがわしいもの（帰結的な

い循環するプロット), もう一方で Harcourt と Alithea の間に見られる真面目で理想的な恋愛(結婚というハッピー・エンドに落ち着くプロット)という全く異質のものが共存している為, この劇の解釈を曖昧なものにしている。このようなアイロニカルな現象は Restoration comedy の興隆と同時に早くもその劇形式の衰退——それにとって代わるものとして sentimental comedy の萌芽——を暗示するものではないだろうか。

以上 Horner の言動, 劇を構成するプロット, 登場人物が置かれている状況, 劇のモチーフなど, いろいろなレベルでアイロニーの重層性が顕著に認められることを例証することにより, *The Country Wife* は極めてアイロニカルな劇であることが判明した。¹⁷⁾ Horner は実に興味深い人物である。演劇人にとって多面性を持った Horner の役を演じることは, Hamlet や King Lear を演じるのとは違った意味で一つの挑戦であるだろう。知的で冷静で機智に富む一方で, Don Juan 宜しく次々と餌色を重ね, 別の女を守る為にある女に対して平気で不誠実な扱いをする。関係を持った相手が納得づくのことであるので, 誰も傷つくことなく最後は丸く(?), だがアイロニカルな結末を迎えている。

もし, そのような Horner が喜劇の常として最後に懲らしめられていたら(たとえば V. D. にかかるとか本物の impotent になるとか), この劇は教訓を伴う諷刺劇に終っただろう。Wycherley は痛烈な諷刺家では決してない。彼はアイロニカルな機智の体現者として Horner を創造したのである。Hornerこそこの上ないアイロニストである。だが, Wycherley はその上手を行くアイロニストであった。

注

- 1) H. T. E. Perry, *The Comic Spirit in Restoration Drama* (New Haven: Yale U.P., 1925), p. 43.

- 2) Kenneth Muir, *The Comedy of Manners* (London: Hutchinson University Library, 1970), p. 76.
- 3) R. Edgley, "The Object of Literary Criticism," *Essays in Criticism*, xiv (1964), 233.
- 4) Cf. Rose A. Zimbardo, *Wycherley's Drama* (New Haven: Yale U.P., 1965), pp. 154-156.
- 5) Bonamy Dobrée, *Restoration Comedy* (Oxford: Clarendon Press, 1924), p. 78.
- 6) Virginia Ogden Birdsall, *Wild Civility* (Bloomington: Indiana U.P., 1970), p. 136, p. 156.
- 7) John Palmer, *Comedy of Manners* (London: G. Bell and Sons, 1913), p. 128.
- 8) See Thomas H. Fujimura, *The Restoration Comedy of Wit* (New York: Barnes & Noble, 1968), Introduction, pp. 3-15.
- 9) 行数指定は New Mermaids 版に依る。John Dixon Hunt (ed.), *The Country Wife* (London: A & C Black, 1985).
- 10) A. N. Kaul, *The Action of English Comedy* (New Haven: Yale U.P., 1970), p. 130.
- 11) John E. Cunningham, *Restoration Drama* (London: Evans Brothers Limited, 1966), p. 83.
- 12) Cf. Anthony Kaufman, "Wycherley's *The Country Wife* and the Don Juan Character," *Studies in English Literature* (1976), 216-231.
- 13) Cf. Anne Richter, *Restoration Theatre* (London: Edward Arnold, 1965), p. 79 and Kaufman, *op. cit.*, p. 220.
- 14) こういう男の原型は古くは古代ローマの Terence や、古代ギリシアの Menander の作品の中に、それぞれ見出すことができる。
- 15) See James Thompson, *Language in Wycherley's Plays* (The University of Alabama press, 1984), p. 73.
- 16) Cf. 拙稿「"Oil and vinegar"—*The School for Scandal*に見られるアイロニーと諷刺——」『英文学評論』第64集（京大教養部英語教室，1992）
- 17) Thomas H. Fujimura も同じような事を述べている。Cf. Thomas H. Fujimura (ed.), *The Country Wife* (London: Edward Arnold, 1965), Introduction, pp. xv-xvi.